

第三者評価報告書

学校名	瑞穂町立瑞穂中学校
実施日	令和6年2月16日(金)
評価者	東京女子体育大学教授 田中 洋一

<授業観察>

- ・授業は落ち着いている。短時間しか見ておらず、観察していない場面で生徒主体となっていたのかもしれないが、やや教師主導による一方的な説明が多いように感じる。
- ・些細な事、小さなことでも構わないので、生徒に発言する機会を増やすべきである。
- ・教師側からの「問いかけ」を工夫して、生徒が主体的に学習内容に迫っていけるような授業づくりを目指す必要がある。生徒の授業に取り組む姿勢や学習意欲の向上につながることを期待できる。
- ・学習支援員との連携について、計画的に事前に打ち合わせを行い、役割分担を明確にしておくとうまいであろう。
- ・支援員への指示を明確にして、TTとしての機能をさらに高める工夫をするべきである。
- ・ICTの使い方として、プロジェクターを使用した数学の授業は、とてもよかった。機能的、効率的に使用されていた。
- ・ICTというと、とかくタブレット端末に注目が集まるが、それだけに頼る必要はなく、アナログとデジタルの組み合わせも検討していくべきである。
- ・情報の過多に陥らないよう注意すべき。ノートに写す作業など、理解定着の時間を取ることが大事である。
- ・学習評価については形勢的評価を意識すべきでそのためにも、観察だけに頼るのではなく、記録を残すことが必要で、やはりワークシートが有効である。
- ・授業改善に向けては、OJTと関係するが、ベテラン教師の良い授業を参考に、管理職からも、「〇〇先生の〇〇を見たり、参考にしたりするといい。」などのメッセージを若手に送ることも大事である。
- ・発問の仕方や板書の仕方など、ICTだけに頼らぬ授業内容の工夫も行うべきであろう。

<学力向上 家庭学習 >

- ・学力向上については、「学校」の課題であることはもちろんであるが、「町全体」の課題でもある。
- ・学校と家庭の役割分担をきちんと示し、家庭での学習と学校での学習を合わせて、生徒の学力向上につなげたい。
- ・宿題(課題)というと、学校の授業でできなかつたところを家で補うイメージがあるが、道筋をつけた授業になっているかどうか、効果的な家庭学習のカギとなる。学習の使い分けが必要である。
- ・課題については、学ぶ側(生徒)のキャパシティに合わせる必要もあり、課題過多とならないように、各教科で住み分けをする必要がある。

<主体的・対話的で深い学び>

- ・生徒が、自分の考えを持つ、持たせることが大切である。「私はこう考える。」「私はこうする。」という場面を作り、一人一人が自分の考え持ち、対話し、共有することで価値を見出し、それが深い学びにつながる。
- ・知識、技能をきちんと押さえることも重要である。単元の中で、一つでもよいので、生徒に考えさせていくことが大事である。そうすることで、教科の本質的なおもしろさが伝わり、生徒の学習意欲の向上や向上心につながっていく。

<学校運営協議会>

- ・PTAとの棲み分けが難しい。学校の運営に関わる「知恵」を出してもらうのが本来の主旨で、「労力」だけを求

めるのは方向が違う。学校側からの「投げかけ」が問題となるであろう。

- ・委員の方々から率直な、意見を言ってもらったり、課題だと思っていることを一緒に検討したり、家庭に伝えにくいことを言ってもらおうという機能もある。
- ・人選、情報共有の仕方に工夫が必要である。

<不登校>

- ・コロナの影響もあり、「学校だけが人生じゃない」という世の中の風潮がある。
- ・不登校の理由には様々な要因が考えられるが、登校を促すことが困難な家庭もあるので、対策として、「学校に行きたいけど、行けない。」「勉強したいけど、できない。」生徒に手をさしのべる。できるところから手を打つといった考え方を持つことが大事である。
- ・「生徒が不幸にならないように」といった視点で検討していく必要であろう。。

<学校評価>

- ・落ち着いた生活が見られてよい一方、生活指導がやや古い感じが否めない。現状、校則で生徒を縛っているのは中学校だけで、小学校も高校も自由な雰囲気がある。教師と生徒との信頼関係を強化して、規則だけで生徒を管理するといった考え方は、意識を変えていく必要を感じる。
- ・「服装の乱れは生活の乱れ」と以前はよく言われていたが、今は、自己実現の一部ととらえるように徐々に変化してきている。
- ・学校に対するクレームに対しては、学校側が誠意ある回答をすることが重要である。学校側が動いたことを見せることも必要である。
- ・書かれたことに対して、変化がなければ、保護者は「何を書いても同じだねー。」ととらえてしまう。
- ・家庭との意思疎通が大事である。

<学校関係者の意見を踏まえて(地域からの声)>

- ①教員集団として、特に校則などに対する指導の統一性が弱く、子供たちが戸惑う場面が見られた。必要のない指導、理由が明確でないきまりなど、今一度検討すべき。高校側も変化してきている。
- ②家庭と学校とのコミュニケーションの場が少なく、互いが向き合う時間が少ない。
- ③部活動の外部委託が心配。生徒との関係が薄れてしまうのではないか。
- ④習熟度別に行なう教科で、下のクラスの人数が多くて、手厚い指導がなされていない不安がある。

<まとめ(田中教授)>

- ・よい学校経営を行っている。
- ・今後もCS構想に向けた、課題解決を一つ一つ克服していってもらいたい。
- ・喫緊の課題としては

学校の考え方などを地域への情報発信を強化する。

価値観が多様化している時代だからこそ、大きな声の保護者や地域に左右されることなく、教員が共通理解をし、同じ方向を向いていくことが大事である。

これからの新しい教員に対して、様々な機会を与えて、全体で育てていくことが大事となる。